



薬局・薬剤師のためのニュースメディア

©じほう2018

HARMACY NEWSBREAK

株式会社 じほう

この通信は会員が直接利用される以外、コピー等による第三者への提供は固くお断りいたします

月2回は訪問、1回はスマホ…遠隔服薬指導どう活用

Hyuga Pharmacy（福岡） 移動時間節約で他患者に振り向け

国家戦略特区における遠隔服薬指導の登録事業所となったHyuga Pharmacy（福岡県春日市）。中医協で関連報酬の算定が了承された7月18日、福岡市内の店舗で行った全国初の遠隔服薬指導は円滑に終了した。薬剤師のやりくりで苦労する中、在宅訪問のうち何回かを遠隔服薬指導に切り替えるなどの活用法を模索しており、1年後をめどに対象患者を10人ほどに増やしたい考えだ。今後は、調剤した薬を患者宅に届ける際の配送業務を宅配業者に委託することも試行する予定。宅配便と自社便の併用も考えている。

国家戦略特区の指定区域となっている福岡市から、遠隔服薬指導の登録事業所の認可を取得しているのは、同市内の「きらり薬局名島店」（東区）と「きらり薬局重留店」（早良区）。2店舗とも在宅を行っている。福岡県を中心に調剤薬局23店舗を展開する同社は、在宅を行う薬剤師の不足や時間の制約があるなどの課題を抱えており、今回、遠隔服薬指導の実施に名乗りを上げた。

●薬剤師が映した薬情も患者がスマホで確認

2店舗のうち名島店では7月18日、遠隔服薬指導でも薬剤服用歴管理指導料を算定することが中医協で了承された直後、全国初の遠隔服薬指導を実施した。対象患者は博多湾の入り口にある東区の志賀島に住む85歳の女性患者。志賀島は九州本土と橋で結ばれており、普段は車で片道40分かけて在宅訪問を行っている。

同社や患者のかかりつけ医は、インテグリティ・ヘルスケア（東京都）が開発したオンライン診療システム「YaDoc（ヤードック）」を導入。当日は自宅にいる患者がスマートフォン（スマホ）、薬局の薬剤師がパソコンを使い、10分間ほど遠隔服薬指導を行った。薬剤師は動画と音声を紹介し、対面時と同様、服薬指導、残薬の確認などを行い、患者からの質問にも回答。薬は遠隔服薬指導後、調剤・鑑査を行った上で患者宅に届けた。

Hyuga Pharmacyの黒木哲史社長は初の遠隔服薬指導を終え、「薬剤師が訪問しなくて済むようになるので、仕組みとしてはすごく良い」と実感。移動時間などを節約でき、空いた時間を他の業務や他の患者に振り向けられるようになると歓迎する。

対面と組み合わせ、「2回に1回はオンラインや宅配便でできるようになると、在宅に尻込みしている薬局も（在宅を）できるようになる」と薬剤師による在宅の底上げにつながることを期待する。

システムについても「使い勝手が良く、画像はきれい。音声も問題ない」と指摘し、実際に薬剤師が画面に映し出した薬剤情報提供書も患者側のスマホで十分に確認できたという。志賀島の患者は今後、月2回は訪問、月1回は遠隔服薬指導という組み合わせでフォローすることを想定している。

●配送業務の宅配業者委託も試行へ

今回、薬は調剤・鑑査を行った上で薬局のスタッフが患者宅に届けたが、今後は宅配業者を使うことも試す。宅配便の配送は基本的に翌日になるため、薬が当日中に必要な場合は、同社社員が直接届けるなど、宅配便と自社便を併用することも検討する。委託する宅配業者は必ずしも1社に絞ることはせず、「温度の問題、配送のスケジュールなどを今後、協議しないといけない」（黒木社長）。宅配業者に委託した際の送料を薬局側、患者側のどちらが負担するかは今後の検討課題の一つに上がっている。

同社では今後、遠隔服薬指導の対象患者を順次増やしていきたい考え。対象者はあくまでオンライン診療を受けていることが前提になるため、患者だけでなく医師の意向にも左右されるが、「1年後くらいにはできれば10人くらいにはしたい」と黒木社長。

「何人かやりそうな人はいるので、そういう人に対して、アプローチしていく」と述べ、今後はもう1店舗の重留店の患者にも遠隔服薬指導の活用を勧めたい考えだ。
